

また、性的に目覚める時でもあり、異性が気になる時でもある。ドキドキしたり、切ない気持ちになったりする。周りから見ると、非常に不安定に感ずるものであるが、そのような時期はみんなが通ってきた道である。周りの大人は、そうした子どもの変化に気付いて接したいものである。今回の「告る(こぐる)」という事象も、強制されるならば、いじめの事象であるのとれないこともない。そんな中で「パンツすらし」など人間の尊厳を奪う行為が、単なる「遊び」ですますわけにはいかないことは明白である。日常的な観察の目を鋭くして、子どもの指導に当たりたいものである。

エ 様々な課題に挑戦し、成就感を得させることが大切

思春期の子どもたちは、時に思わぬ力を発揮することもある。クラス対抗の球技大会、コーラス大会など、様々な面での活動が活発になる時期でもある。子どもたちは、どのような困難があると思われることへも挑戦する力を備えている。それをうまく開花させてやるのが、このころの子どもたちへの指導の醍醐味である。担任も一緒になって、様々なチャレンジにはらはら、ドキドキする場面があるが、その結果を共に喜び、共に残念がることの出来るのが、学校の良さである。感性を鋭くし、子どもの世界を理解し、成就感を得させてやるのが大切である。

4 生徒の学校参加

(1) 学級集団づくり

なぜ学校教育で集団づくりが必要なのだろうか。改めて述べるまでもなく、学校における集団生活の中で多様な人との関わりを通してお互いの存在を実感し自己肯定感を育み、違いを認識しそれを尊重できるようになるためである。また、努力や協力をしながら問題を解決する中で連帯感・達成感を体験し、人への共感や信頼感をもつためである。

集団づくりとは、一人ひとりと違った個性や生活をもった子どもたちを、ていねいに“つないでいく”ことである。また、集団づくりの目標は、子どもたちに、集団の中での他者との関わりを通じて自分という存在に自信をもち、自己肯定感を育むことである。そして、人間への信頼感を育て、「友だちが好き」「友だちとかがわかることか楽しい」と言えるような、「人とかがわかる力」、「人とつながる力」を身につけさせ、対等な関係を結ぶ力を育てることが重要である。集団が形成されていく過程においては、ケンカあり、トラブルあり、「泣き」も「涙」も「笑い」もある。その一つ一つを教員が丁寧に拾い上げ、学級の集団に返しなから、子どもたちにしつかりと考えさせていく、この営みこそが教育であろう。そういった経験の中で仲間に対する「思いやり」が生まれ、人に対する「優しさ」が生まれてくる。

望ましい学級集団のかたちを図示するならば、以下のようなものになる。

望ましい学級(集団)

- 安心できる場所
- ① 環境が整備されている。
- ② 自分を肯定、理解してくれる人がいる。
- ③ きまりやルールがあり、守られている。

- ① 楽しいことがある。
- ② 自分の役割がある。
- ③ 自分の努力が認められる。
- ④ 他の人を肯定・理解することが出来る。

こうした「望ましい学級(集団)」づくりは、学校教育全体でなされる生徒指導だけでなく、「総合的な学習の時間」や「特別活動」の時間を用いながら行われる。次にあげるような「いじめ防止学習」のプログラム(実態把握及び理論学習)をまとめた時間設けることも有効な手立てだろう。

○いじめの実態把握

→アンケート(前出のQ-U理論)、面談の実施、授業、講話、ロールプレイ、VTR、作文など多様に考えられる。

- 具体的カリキュラム
- ・被害の辛さに共感するための手記を読む。

- ・ロールプレイ(役割分担) — いじめによる立場の違いの心情理解
- ・思春期のドラマド論

— いじめを訴えられない心理や仲間同士でいじめ合う同調圧力の心理
→ こうして「自己相対化」することにより、自分自身の力でいじめられつつ子が精神的自立を遂げ、脱出できる。加害者も自分の心理を見つめ向上しようとする。

- ・メディアリテラシー論 — ケータイリテラシーも含めて
- メディアの特性や問題点を学習し、上手な使い手になる。
- ・スクールロー教育の導入(弁護士、警察との連携)

→ 未来を見据える中で人権侵害を憎み、人生の想いを育てる。
— 将来の主権者としての市民教育

(2) 生徒会活動

こころの通う学校づくりは、日常の教育活動の中で醸成されるものである。生徒たちが日々活動する中で、相互の連帯感も育てられ、いじめの起きることのない集団形成がなされるものである。そのためには、もっと、学校運営の中に生徒の意見を取り上げるような方策が必要であろう。

子どもは本件中学校の再生を望んでいる。今までの慣習に基づき学校運営ではなく、生徒参加の学校づくりが強く望まれるところである。

その中心が生徒会活動である。生徒会活動とは、学校の全生徒をもって組織され、教員の適切な指導の下に、生徒の自発的な活動により、学校生活の充実や改善向上を図る活動である。「いじめ」の問題をはじめ学校で生起している様々な身近な問題を、生徒たちが自身が真剣に討議し、具体的な取組を実践する活動は、何処の学校でも求められる。

その兆しは本件中学校の生徒たちに芽生えつつある。生徒会が生徒たちの悩みを受けつづける窓口となつて、生徒同士で相談するというプロジェクトを生徒会役員が発案し実行している。学校を良くしようという話し合いを頻繁にもつていくという。以前より、周囲のからかい行為に対してお互いに注意ができるようになったという。

こうした取り組みや討議の輪を、さらに大津市のすべての小・中学校に広げていく「大津市児童・生徒会実践交流会」を開催してみようか。交流会で話し合ったことや他校の実践を自校に持ち帰り、それぞれの学校での話し合い活動や取組実践に繋げていくというのはどうだろうか。

隣接する京都市では、「京都市中学校生徒会サミット」が開催されている。具体的な活動例として紹介しておきたい。

京都市中学校生徒会サミット

平成 24 年 8 月 29 日、京都市教育相談総合センターで京都市立中学校の各支部の代表生徒 17 名による「京都市中学校生徒会サミット」を開催した。

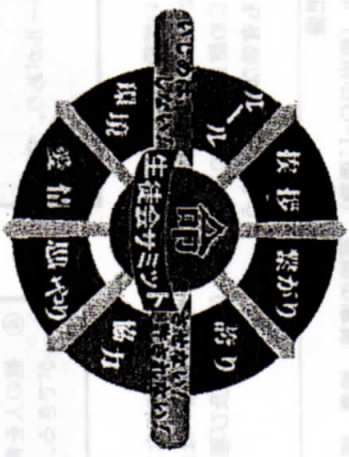
「いじめ」や「命の大切さ」について、大人 15 名（教育長や P.T.A.・市民団体・警察・校長会・教育委員会の代表等で構成する「京都市子どもの規範意識を育むプロジェクト」のメンバー）とも協議を行った。

1. 挨拶は、自ら進んで声を出します。
2. 学校のルールを大切にします。
3. 環境美化には、主体的に取り組みます。
4. 自然やモノに対して、愛情を持ちます。
5. 友だちには、思いやりを持って接します。
6. 楽しい学級になるように協力します。
7. 全校生徒が誇れる学校を目指します。
8. 地域には積極的に関わります。
9. いじめは、しない！ させない！ 許されない！
～かけがえのない命が世界で一番大切！～

平成24年8月29日

(京都市教育委員会 資料)

京都市中学校生徒会議宣言



23.8.18 8支部が1つに、8個の提案
24.8.29 8支部が2団体に、9個の提案

*8支部とは、北・上京・中京・下京・南、左京、東山・山科、右京、伏見です。

(京都市教育委員会 資料)

また、有志によるいじめ克服のための活動の展開として、愛知県西尾市立東部中学校の実践を紹介しておきたい。

ここでの特徴は、18年も前、前の大河内清原君の悲劇を2度と繰り返すまいと、今も生徒の自主組織「ハートコングラト」が命日にテーマ「いじめを受ける人の気持ち」で集会を開き、「それっていじめじゃない」と題した劇を上演し、連族との交流を続